



歴史学・小説

奈良本辰也

周防大島町
(1913～2001)



【著作】

評伝『吉田松陰』（昭和26・岩波書店・新書）
随想『京都百景』（昭和39・淡交新社）
小説『洛陽燃ゆ』上・下（昭和53・講談社）ほか

【閲覧情報】

没後、その蔵書が一括して学校法人瓜生山学園・京都造形芸術大学に寄贈され、「奈良本辰也記念文庫」として研究者・学生らの利用に供されている。

大正二年（一九一三）十二月、風光明媚な瀬戸内の山口県大島町（現・周防大島町）に生まれ、少年時代は病弱で文学書に親しみ、小説家への道を夢見た時期もあった。

結局、京都帝大で日本史を専攻したことから歴史学者の道を歩み始め、昭和十八年（一九四三）に最初の著作として世に問うたのが『近代陶磁器業の成立』で、皇国史観盛んな時代、あえて陶磁器を対象とした点、氏が生涯一貫して持ち続けた反骨精神が伺われる。

戦後、昭和二十一年（一九四六）に立命館大学専任講師、更に翌年、同校文学部の助教授となり、旺盛な執筆活動を開始。この年発表の論文「幕末における郷土Ⅱ中農層の積極的意義」や「幕末における公武合体論の形成とその意義」等が大いに注目され、新進気鋭の歴史学者としての評価を得、文学部教授昇進後は、第一線文化人による「平和問題談話会」への参加で社会的な活動も盛んとなっていくが、特に、歴史的に長く底辺に置かれ差別されて来た「部落問題」に対する真摯な取り組みは尊いものであった。

なおその間、昭和二十六年（一九五一）、岩波新書として刊行された『吉田松陰』は、戦後混乱期の中で民族独立を模索していた時期だけに、維新期のリーダーたる松陰の姿が時代のよき指針となる名著として版を重ね、歴史学者としてのオビニオン・リーダーたる一人としての評価を得る。

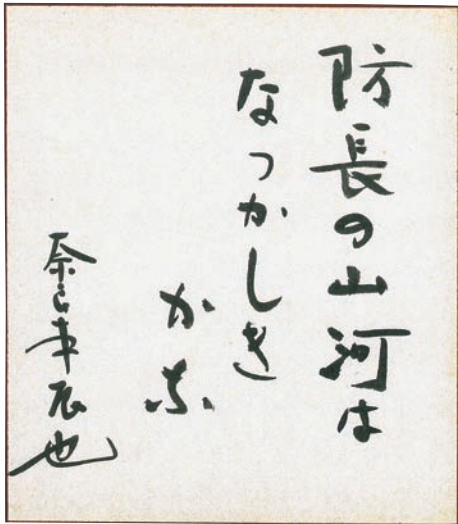
その後昭和三十年（一九五五）刊行の『京都の庭』に始まり、次いで『女人哀歓』『京都百景』などと続く文化史的随想も、学術的知識、美的認識、人間的情感などが混然一体となって新しい魅力を切り開いていった。

そうした中で大きい転機を迎えたのが昭和四十四年（一九六九）の学園紛争で、その激化に対し自らの辞職をもって問題提起とし、以後、自宅内に「奈良本歴史研究室」を創設するなど、自由な立場での活動に徹した。

そして特筆すべきは、若い頃心に秘めた小説家への夢がよみがえり、郷里長州の長井雅楽を描く『もう一つの維新』に始まり、次いで『小説・葉隠』、幕末をテーマとした『洛陽燃ゆ』上・下と執筆していくが、この頃から病気がちで、平成二年（一九九〇）から雑誌『フロン

ト』に連載中の日本各地百八箇所を滝を巡る大仕事を、妻に支えられ『日本の滝紀行』上・下二冊として完成。京都にあつて「私は長州人だ」と常々語られながら八十七年の生涯を閉じられた。

（文・清水唯夫）



直筆の色紙



著書（歴史小説部門）

『洛陽燃ゆ』という題をつけたとき、どこにでもありそうな題名だなと思っただ。しかし、色色と考えてみたが、矢張りこれが一番私の思っていることに相応しいのではないかといいことで、これに決ってしまった。

時代が移るとき、即ち歴史が大きな転換の時期にあるときの姿は、まさにこのようなものだった。私は、これまでそれを史学の論文に於て論じたものである。

しかし、此処数年来、小説らしきものに関心を抱き、そうした作品を書き続けてきた私は、今度は小説の形でそれを描き出してみたいと考えた。幸いに、京都新聞社の方から夕刊の連載小説を書いてみないかと言われたので、それを機会に念願を果すことにしたものである。

歴史家が何故小説を書くのか。事実は小説よりも奇なり、という言葉があるではないか。お前は只、事実のみを書けばよいという人もいる。しかし、私は矢張り小説の形で書くことにこだわるのである。

何かの機会に書いたり話したりしたことがあったが、登場人物の心の變にまで入ってゆくことで、歴史的思考の幅を広げてみたかったのだ。

『洛陽燃ゆ』上下（講談社刊）あところがき。より

奈良本辰也 年譜

（提供・清水唯夫）

大正2（一九一三）年	
大正15（一九二六）年	一三歳
昭和10（一九三五）年	二二歳
昭和13（一九三八）年	二五歳
昭和14（一九三九）年	二六歳
昭和15（一九四〇）年	二七歳
昭和16（一九四一）年	二八歳
昭和18（一九四三）年	三〇歳

12月11日、奈良本重助・ウミの次男として山口県大島町小松（現・周防大島町）に生まれる。
3月28日、母フミが死去。山口県立岩国中学校に入学。
病弱の少年で文学書に親しむ。
4月、旧制松山高高等学校文科甲類を経て京都帝大文学部史学科に入学。
京都大学卒業後、6月に兵庫県立豊岡中学校に赴任。
京都市史編纂事業にたずさわる。この年召集されるが既往症のため即日除隊帰郷。
4月5日、渡辺毅夫の三女千枝と結婚。
12月4日、長男英佑誕生。精力的な執筆活動始まる。
9月2日、長女待子誕生。この年、最初の著書『近代陶磁器業の成立』を刊行。

昭和20（一九四五年）	三二歳
昭和21（一九四六年）	三三歳
昭和22（一九四七年）	三四歳
昭和23（一九四八年）	三五歳
昭和25（一九五〇年）	三七歳
昭和26（一九五一年）	三八歳
昭和30（一九五五年）	四二歳
昭和33（一九五八年）	四五歳
昭和34（一九五九年）	四六歳
昭和35（一九六〇年）	四七歳
昭和41（一九六六年）	五三歳
昭和44（一九六九年）	五六歳
昭和45（一九七〇年）	五七歳
昭和46（一九七一年）	五八歳
昭和49（一九七四年）	六一歳
昭和51（一九七六年）	六三歳
昭和52（一九七七年）	六四歳
昭和53（一九七八年）	六五歳
昭和56（一九八一年）	六八歳
昭和58（一九八三年）	七〇歳
昭和60（一九八五年）	七十二歳
昭和62（一九八七年）	七四歳
平成6（一九九四年）	八一歳
平成7（一九九五年）	八二歳
平成9（一九九七年）	八四歳
平成13（二〇〇一年）	八七歳

戦時下、一家をあげて郷里大島に疎開。8月の敗戦直後に陽チフスのため生死の間をさまよう。
京都へ戻る。4月26日、次女まゆみ誕生。立命館大学専任講師となる。
立命館大学文学部助教授となり、旺盛な執筆活動を開始。立命館大学文学部教授となる。
部落問題研究所長となる。
7月、岩波新書の一冊として『吉田松陰』を刊行。
10月、『京都の庭』を刊行。後の『女人哀歓』『京都百景』などにみるエッセイストとしての原点。
中国科学院の招待で訪中。バセドウ氏病を患う。
立命館大学文学部部長となる。大津市史の編纂に着手。
1月、部落問題研究所の業績で「朝日賞」を受賞するが、その直後に研究所長を辞任。10月、アメリカ合衆国国務省の招待で渡米。
学園紛争の激化に対し、自らの辞職をもって問題提起とする。
「卒業はない大学」の塾長をつとめながら文筆活動に徹する。
自宅内に「奈良本歴史研究室」を創設。会田雄二・陳舜臣らと季刊誌『歴史と文学』を創刊。
12月、最初の歴史小説、長州藩の長井雅楽を主人公とした『もう一つの維新』を刊行する。
8月、『小説・葉隠』を刊行する。
京都イングリッシュ・センター学院長となるが、この年病に伏し、淡路島の山荘で療養に努める。
4月、幕末史をテーマとした歴史小説の大作『洛陽燃ゆ』上・下を刊行。
6月、朝田教育財団理事に就任。信州農村開発史研究所長に推されるが再度の脳内虚血で倒れる。
1月、『京都新聞文化賞』を受賞。体調不良のこともあつて「研究室」を閉じる。
学校法人瓜生山学園理事に就任。
6月、『松本治一郎賞』を受賞。
『防長歴史散歩』全七巻（清水唯夫編纂）を直木賞作家古川薫と共に監修する。
2月、『京都府文化賞特別功労賞』を受賞。
平成2年から雑誌『フロント』に連載を始めた日本各地一〇八箇所にあぶ滝を巡る大著『日本の滝紀行』上・下二冊を刊行。
3月22日、逝去。